

唐代小説『乾驥子』に就いて

— 温庭筠との關わり —

黒田眞美子

はじめに

北宋、太平興國年間に編まれた『太平廣記』には、出典を『乾驥子』とする文が三十三篇收められている。この書を書目に捜求すると、『崇文總目』卷二七を初めとして、『新唐書』藝文志小説家類、『直齋書錄解題』卷一一、『郡齋讀書志』卷二三、『文獻通考』卷二一五ではいずれも「三卷」として著録されており、鄭樵の『通志』卷六八では「一卷」となっている。恐らく、本來三卷であったらうこの書は、鄭樵の北宋末から南宋初にかけて散逸した可能性が大きい。『宋史』藝文志に至っては、もはや著録されていない。つまり、この書は南宋末以降、足本として人の目に觸れることはなくなつたのである。

このように早く散逸して卷數の亂れも見える書であるが、撰者に關しては、右の各書目はすべて、晩唐の文人、温庭筠としてゐる。だが、これはあくまでも、五代という混亂期を経た後の宋代の見方である。果して『乾驥子』は温庭筠の手に成るものか否か、またたとえ温庭筠が『乾驥子』を書いたことが事實であるにしても、現存の各篇が、原本の殘存作であるか否か斷定し難い。本稿は、現存の『乾驥子』各篇の特質を追求し、それが温庭筠といかなる關わりを有するかを考察し、

あわせて唐代小説の一側面を把握せんとするものである。

I、『乾驥子』現存作品

『乾驥子』という書名の由來については、五種の記述があるが、最も詳しいのは、『直齋書錄解題』のそれである。

不爵不飢、非魚非豕、能悅諸心、聊甘衆口。庶乎乾驥之義。

これによれば「乾驥」とは、酒の類いでもなく、あぶったり焼いたりしたものでもない（恐らく乾肉の類いだらう）が、人々の心を喜ばせせるものという意であり、この書物もそのように人々を喜ばせたいという趣意による命名であらう。

この『乾驥子』の作品と傳えられる文章を最も多く収録しているのは、前記の『太平廣記』である。次いで、紹興七年(1137)の序文を付す『紺珠集』に二十篇が收められている。ただ後者の各篇は、いずれも断片に近い。標題を付して、これに關連する部分のみを原文から切り取るといふ、恣意的な採録がなされているのである。しかし、『太平廣記』以外の作品が十四篇も收められていることは、貴重といえよう。この二類書に次いで、明代の『重較說郛』(15) 第三三所收の十一篇があげられる。うち八篇は清代の『龍威秘書』に再録されている。ま

た、清の王仁俊輯『經籍佚文』子編所收『乾驥子佚文』一卷（上海圖書館藏）は、「哥舒翰」一篇を録している。

この他、徽宗の時の人、馬永易の『實賓錄』（『說郭』卷三）に二篇が採られている。うち一篇が、「孟軻」（『太平廣記』卷三六七所收）の概略を記しているところからみて、「石祭主」と題する一篇も、失われた篇の概略を記したものと思われる。

以上、『太平廣記』の三十三篇にこれと重複しない『紺珠集』の十四篇、『實賓錄』の一篇を加えた四十八篇が、『乾驥子』の現存作品のすべてである。以下にこれらを関連資料とあわせて一覽表に整理しておく。

作品番號	『太平廣記』題記	『太平廣記』卷數	『紺珠集』	『重校龍威秘書』
(1)	陳義郎	122 報應冤報		
(2)	陽城	167 氣義		
(3)	李丹	170 知人	5 [同]	5 [同]
(4)	武元衡	177 器量	1 [同]	1 [同]
(5)	閻濟美	179 貢舉		
(6)	嚴振	190 將帥才名		
(7)	鮮于叔明	201 好尚	2 [同]	2 [同]

(數字は配列順)
 関連資料(卷數/卷内通し番號)
 『李文敏』(『廣』128出『聞奇錄』)、『崔尉子』(『廣』121出『原化記』)、『卜起傳』(『青瑣高議』後集4)、『相國寺公孫合汗衫』雜劇、『白羅衫』傳奇(『茶香室叢鈔』17)、『蘇知縣衫再合』(『警世通言』11)……以上「類」
 『新』194……『約』、『補』上/95、『林』3/規箴……『部分』
 『紀』36、『全唐詩話』2……同、『全唐詩』281

(8)	權長孺	201 同右			3 [同]	3 [同]	『因話錄』1/13……『補』
(9)	裴弘泰	233 酒			10 [同]	7 [同]	
(10)	蕭俛	242 謬誤			4 [同]	4 [同]	『補』中/13、『林』6/37……『ほぼ同』
(11)	苑訥	242 同右					
(12)	竇乂	243 治世					
(13)	裴樞	244 褊急					
(14)	張登	257 嘲諷					
(15)	鄭羣玉	261 嘲諷					
(16)	梅權衡	261 同右					
(17)	王諸	280 夢					
(18)	道政坊宅	341 鬼					
(19)	華州參軍	342 鬼					
(20)	李傳伯	343 鬼					
(21)	張弘讓	344 鬼					
(22)	寇郟	344 同右					
(23)	梁仲朋	362 妖怪					
(24)	王翹	363 妖怪					
(25)	曹朗	366 妖怪					
(26)	孟軻	367 妖怪					
(27)	薛弘機	415 草木					
(28)	何讓之	448 狐					

『西陽雜俎』諸事記下……『類』
 『奇鬼傳』……『同』
 『歲時廣記』33……『同』
 『冤憤志』(『唐人說會』)……『同』
 『實賓錄』……『約』、『少室山房筆叢』35/27……『ほぼ同』
 『靈怪錄』(『唐代叢書』)……『同』、『全唐詩』867
 『廣』453『王生』454『張簡棲』、『類說』11『狐通天經』、『醒世恒言』6『小水灣天狐貽書』……『類』、『歲

類話として六種を列挙したが、ここでは篇幅や成立時期の點で最も類似する『原化記』の「崔尉子」（以下「崔」と略す）と比較しよう。兩篇の粗筋は次のようである。

母を残して赴任する男が、途次、殺される。犯人は不慮の出来事を装い、妻子（崔）では妊娠中の妻と官位財産（崔）では財産のみとを自分のものにして異郷で暮す。成人した息子が應擧のため都へ赴く。途中、互いにそれと知らず祖母に出會い、祖母から亡父の衣杉を贈られる。家に歸り、その衣杉を目にした母は驚愕し、約二十年前の真相を語る。息子が仇を討つ。（崔）では役所が誅載する。）

兩篇とも、母が亡夫の衣杉を目にして真相を語る場面をクライマックスに、緊迫感をじわじわ盛りあげていく構成は同様である。だが、次の二點の相違によって、兩者は異質の作品といわねばならない。

その一は、布石の有無である。「陳」には、出立前、嫁の郭氏が母のために衣を裁ち、誤って指を傷つけ、白絹の上に血を滴らしたという記述が見える。郭氏が「お母さま、この血痕を見ては思い出して下さい。」と言って二人で涙に噎ぶ別れの場面である。血が持つ不吉な死の匂いと、鮮やかな色彩の對比が効果を高めている。だが、それは單なる効果ではなかった。最後に母が真相を語るに至る重要な決め手となるのである。このような首尾呼應する話の完結性が「崔」には無い。「崔」での決め手は、焼けこげという醜さであり、最後の場面で説明的に語られるに過ぎない。

次いで指摘すべきは、犯人像の相違である。「崔」の犯人は、金目當に通り魔的犯行に及ぶ船頭であるのに對し、「陳」の方は、幼時からの親友周茂方である。この設定の相違により同一の枠組を持った兩篇が、まったく異質の様相を呈しているのである。「崔」は、殺人と

いう罪が「神理」によっていつか裁かれる、その不思議さを描き、そこから一步も出ない。だが、「陳」の方は、それに加えて犯人の意外性という工夫を凝らす。科擧の試験に陳が合格し、周は落ちたが、二人は變わらぬ友情を誓ったという文や陳の子を周は自分の肉身より可愛がったという文は、その彼が「なぜ？」という疑問を起こさせる。無論、周の氣持が鬱屈していただろうことは想像に難くない。羨望が妬みに變わり、殺意が芽生える可能性は十分ある。だがその殺意は、一行が旅立ち、巴江の險難にさしかかった時、初めて「忽ち異志を生じ」たのである。赴任先への同行を「固く請」うたのは陳だという記述も、周の犯行がその時點では考えられていなかったことを表わしている。つまり、周自身、豫期せぬ黒い欲望が突然躍り出た。一旦、意識の明るみに曝された欲望は、もはや統御し得なかつたのである。ここには人間誰もが抱えている危うさがある。人間というものが、恐らく本來的に有している不條理が見い出せる。つまり、「なぜ」という疑問が辿り着くところは、人間とは」という命題ではないだろうか。そうなるとこの篇は、人間存在の危うさと暗黒を凝視させる文學として成立しているのである。作者は、それを意圖して犯人を設定したわけではあるまい。單なる意外性を狙ったに過ぎないだろう。だが、人間にはそうした可能性があるという認識がなければ、この設定は生まれない。そうした意味で、ここには作者自身の人間觀が露呈されているといえよう。

〔1〕は、友愛を裏切った人間の業の深さが、いわば陰画としてこの作に響りを與えている。それを正面から描いたのが、仰「王諸」であろう。

「王諸」は、夢に翻弄されて人生を狂わせられた人々の話である。

中國において、古來より夢に對する關心は高く、それをめぐる話も多い。『太平廣記』卷二七六、二八二には、それらの話を(1)夢休徵、(2)夢咎徵、(3)鬼神、(4)夢遊の四種に分けて収録している。(1)(2)は、夢を分析して吉(①)凶(②)を占い、現實の結果がその通りになった記述を揃えている。(4)は『枕中記』と同様の夢界ともいべき別世界に赴く話もあるが、夢と現實が符合する不思議を記す篇が多い。そして、「王諸」が收められている(3)には、夢の中に鬼神が現われ、何かを豫告したり訴えたりし、後にそれが現實と合致した話が録されている。

このような夢をめぐる話を通して、一つの原則が明らかになってくる。それは、豫兆をも含め、夢は現實と必ず合致するということである。つまり、夢は正夢であって初めて記すに足る話として成立するといえよう。だが、『太平廣記』の夢をめぐる話の中で、唯一、この原則を裏切る作品がある。それが、「王諸」である。以下にその梗概を記そう。

王諸が、友人の姪陳氏を妾に、次いで叔父の娘崔氏を妻に娶る。その後、叔父一家とともに江陵で暮すことになり、妻の兄と王が、先に江陵に行く。家を手入れて疲れた二人の午睡中、二人の夢に陳氏が現われ、崔氏によって三峽に突き落されたと訴えた。その夜再度同じ夢を見た二人は、知らせを待った。果して數日後、陳氏濁水の報が入った。江陵に着いた崔氏は兄に厳しく咎められ、身の潔白を立證できず、髪の毛を切つて死んでしまった。王は遊蕩に明け暮れ、放浪の旅へ。數年後、夏口で陳氏に出會い、眞相を知る。陳氏は足をすべらせて溺れたのである。助けてくれた男と二人の子までなしたという。すべてを失った王は羅浮山に入り托鉢僧となった。崔氏濁水の報が入るところまでは、鬼と化した陳氏が、夢を媒體として直接話法で訴え、それが現實と合致するという『太平廣記』鬼夢

に屬す典型的作品として成立している。したがって、この後の記述こそ、作者の創意工夫といえよう。

この創意の部分は、凄惨な悲劇である。王諸の手前、妹を責めたてた兄の辛さ、夫に信じてもらえず、聲をからして泣きながら死んでいった妻の悲劇は言うまでもない。だが、それ以上に深刻な生を抱えたのは、むしろ王諸だったのではなからうか。妻の死の悲しき、妻を死に追い込んだ痛恨の思いとその喪失感。しかし、彼を打ちのめしたのは、妻を信じきれない己に對する絶望感である。古代より夢が人々の未來を左右し、如何に重要視されていたかは、『東觀漢記』⁽¹⁰⁾などにも明らかである。王諸が、妻よりも夢の方に信を置こうとするのは、決して不自然ではない。だが妻の死という事實の重さ。それでも信じきれない苦惱の深さ。眞相を知るに至るまでの王諸は、妻と夢に引き裂かれた地獄を抱え込んだ。「諸亦蕩遊他處」の六文字が、彼の苦惱を雄辯に物語っている。そこへ、陳氏の出現。この意外性が作者の狙いに違いない。夢の原則の否定である。だがそれは、單なる筋の意外性だけでは終らなかつた。眞相を知つた王諸を待っていたもの、それは妻を信じきれなかつた己の姿である。現代の言葉を用いれば妻を愛することのできなかつた己の不毛の心といえよう。このように三人三様の悲劇が繰り廣げられる中で、一つの疑問が浮びあがってくる。陳氏の告白が眞實ならば、なぜ鬼夢が起り得たのかという疑問である。鬼夢はあくまで鬼にならないと實現しないからである。もっと陳氏は一時的に鬼となつている。それは、「泊屍于墳、忽然而甦」。という記述からも明らかである。その時鬼と化した陳氏の心に、或いは崔氏につき落されたのではないかと疑念が浮んだのではないだろうか。それが王諸と崔氏の兄へ夢の感應を起したのである。そのような陳氏

の疑念はうわべは何の波風もたたない妻妾同居の、その實、嫉妬の渦がとぐるを巻いている心の暗部から發したといえよう。それを感受した王諸も兄も、同様の危懼と不安を持っていたのである。それゆえ、鬼夢が現われた。では、眞相はどうなのか。甦った陳氏の言葉は、明快である。だがそれにはもはや何の意味も無い。眞相は「蔽の中」としかいえないのである。その不透明な暗さこそ、それぞれの悲劇の源であり、眞實であつたといえるのではないだろうか。

これまでの二作によつて、作者が臆せず意外性を追求しそこから端無くも人間の抱えている暗黒が浮び上つてくることを指摘した。そこでは「人は信じ得るか」という問いかけが鋭く迫ってくる。妻を信じきれなかつた王諸にとつて、それは「愛とは」という問いかけにほかならない。その答えの一つが、次の「華州參軍」である。

この作品は悲戀物語である。出會いから戀の成就、そして破綻へと、その経緯を唐代の他の戀愛小説と比べつつ、この作品のオリジナリテイを探りたい。

出會いの場面は、上巳の日、曲江でという時空設定である。六朝以來、様々に詩歌に詠じられ、これほど華麗なイメージを具體的に喚起させる設定は、少ないだろう。その曲江の淺瀬に、金碧で飾られた車が、半ば水につかつて置かれている。春の光に煌く金碧の車、それを映じてゆらめく水面、そこにあでやかに咲き香る蓮の花。やおら車の簾がゆるゆる上げられ、中から玉のような細い手が伸びて花を指さす。柳生が魅入られたように車の後を追うのも無理ないと思われる美しさである。この場面の美意識は、温庭筠の樂府や詞を濃厚に想起させる。彼は詩詞ともに春を詠じ、水のゆらめき、たゆたいを歌うことが多い。また彼は、「金」字を最も多く用いている。そして、「芙蓉」すなわち

蓮は、彼が好んで詠ずる花の一つである。このように温庭筠の美意識との關連を認めよう。

次いで柳生は車のあとをつけて、その家を訪ね、美女崔氏、母王氏、侍女輕紅という家族構成を知る。そして、戀の成就は次のように記される。

母王氏の兄が、崔氏を息子の嫁にと結婚を申し込む。だが崔氏は柳生との結婚を強く訴える。母はやむなく輕紅に使いをさせ、柳生に結婚の話をもちかける。大喜びの彼は、五日後、崔氏と所帯を持つた。

戀の成就にしては呆氣無いが、唐代の他の戀愛小説も、この點では大同小異である。特に「鶯鶯傳」とは、胡應麟も指摘しているように、家族構成や、青衣が寺で仲介する點が類似している。だが、それと決定的に異なるのは、この作品に詩の贈答が無いことである。唐代の戀愛小説では、「遊仙窟」を初めとして男女間で詩を交すのが普通である。魯迅がこの作を、「僅録事略、簡率無可觀、與其詩賦之艷麗者不類」と酷評したのも、「才思艷麗」と評された温庭筠ならば當然、ここに「艷麗」な詩があつて然るべきだと思いが働いたからかも知れない。ここに詩が無いことで、温庭筠との關わりは大きく後退することになる。この點は、後で考察したい。

戀の破綻は、母王氏の死によつて始まる。

喪に出かけた二人が王生に見つかり、役所に訴えられる。先に結婚を收めた王生に夫の資格があると裁かれ、崔氏は王生と暮す。だが、思い止み難き崔氏は、柳生の許へ出奔。搜索されてまた戻される。柳生は江陵に流れ行き、二年後、崔氏、輕紅は、相繼いで没した。

ここで特筆すべきは、崔氏の能動性である。王生の屋敷から柳生の許へ出奔する際の描寫は、「糞堆」を積んで屋敷の垣根と同じ高さにして乗り越えたと、極めて具體的に記される。「鶯鶯傳」の崔氏は、拒絶と突進の振幅が大きく、それが崔氏の人間像に興行を與えている。一方、この崔氏は、ひたすら直線的に柳生をめざす。だが呆氣なく亡くなり、崔氏の悲戀物語として終ったかのように見せながら、次のように展開する。

春二月、江陵に閑居する柳生のところに崔氏と輕紅が現われる。それから二年、幸福な時が過ぎる。ところが偶然、王家の召使に見つかり、都の王氏に報告される。忽ちやってきた王生。門から様子を伺うと崔氏が化粧をしている。額黄を塗りかけた時王生は大聲で叫んだ。すると崔氏、輕紅の姿が消えた。不思議に思った王生と柳生は都に行き、二人の墓を開いた。崔氏の額黄は、今塗ったように鮮やかだった。王生柳生二人は終南山に入り、歸ってこなかった。

通し番號	書名卷數	幽鬼の名	生前の知	正體の明不明	交情の期間	物的證據
1	『廣記』330 (出『廣異記』)	張果の娘	不知	不明	數月↓再生	無
2	『廣記』333 (出『廣異記』)	鄭女郎	不知	明	1十餘日 2半年 3數日	無
3	『廣記』334 (出『廣異記』)	不明	不知	最初一ヶ月↓不明	1一ヶ月餘り 2二・三年	無
4	『廣記』334 (出『廣異記』)	高密の縣令の娘	不知	不明	一年	全縷玉杯玉環 (女から) 繡衣 (男から)
5	『廣記』339 (出『廣異記』)	江州刺史の娘	不知	明	一夜	無
6	『廣記』386 (出『廣異記』)	劉長史の娘	不知	不明	一ヶ月↓再生	無
7	『李章武傳』	王家の嫁	知	明	一夜	白玉寶簪 (男から)
8	『廣記』342 (出『異聞錄』)	楊氏	不知	明	一夜	無
9	『廣記』343 (出『支怪錄』)	崔氏	不知	明	一夜 (その男が思ひ度) 一月餘	無
10	『廣記』345 (出『瀟湘錄』)	皇尚書の娘	不知	不明	數ヶ月	無
11	『廣記』347 (出『集異記』)	王氏	不知	不明	數ヶ月	紅衫 (女から)
12	『宣室志』10	崔氏の娘	不知	不明	百餘日	翠玉鳳冠 (女から) 小金縷花 (女から)
13	『傳奇』	麗眞	不知	明	六十餘日	無

「生前の知不知」……生前お互いに知り合つて愛し合つていたか否か。
「正體の明不明」……幽鬼という正體を知つて情を交したか否か。
「物的證據」……別れに際して交情のしるしとしたもの。

ここでも額黄をめぐつて前後の呼應が見られ、作者の工夫を認め得よう。また、死んだはずの主人公が出現するのも、意外性の追求と見られよう。それとともに、この部分は幽霊との結婚譚という要素を備えた物語として、前の部分とは異なつた視點から捉えられるであらう。

中國では、幽鬼と生者との交情物語(幽婚譚)が、『搜神記』を初めとして數多く記されている。幽鬼が女で、生者が男である場合が多い。本稿では、それらの話を唐代に限つて上の表のように整理した。

この表を一覽して明らかになうに、「不知」「不明」というパターンが最も多い。すなわち、女の生前知り合うことなく、ある日偶然出会い、情を交す。その後、自らの告白、あるいは檢證によつて、女が鬼であることを知るといふプロットである。こ

の型の話は、正體明しのおもしろさと、幽鬼との交情という異事體驗が主眼である。また「不知」「明」の型になると、異事體驗だけに話が絞られ、⑩に著しいように、淫らな様相さえ呈している。

このような幽婚譚と比較すると、「華州參軍」の特異性は、ひとときわ顯著である。表のように表わせば、「知」「不明」となり、管見の範圍で、唐代小説に限ると、他に見當らない。生前の愛情が鬼の出現に繋るのは⑦であるが、共通點は見出し難い。⑦には約八年ぶりに李章武が氣まぐれに王家の嫁を訪ね、鬼と知りつつ交わるのも好色な好奇心ゆえという様子が露わである。しかし、「華州參軍」はまるで異なる。ここで強烈に貫かれているのは、崔氏の激しく眞摯な、柳生への愛である。垣根を乗り越えて出奔した果敢な愛である。それが幽魂に凝縮して再度の出現を叶えたのである。つまり、「華州參軍」におけるテーマは、幽婚の怪異を記すことよりも、幽明の境界を突きぬけるほどの激しく一途な戀情であるといえよう。「陳義郎」「王諸」とは視點を異にしたがらも、やはり深い業を抱えた人間の姿が描かれているのであった。

以上のように①⑦⑧を通して、その獨自性を次のように指摘し得よう。まず、技術的側面として、必ず布石が敷かれ、それが結末で意味を持つて完結する工夫が見られること。大枠は、一つの話の系譜に属しながら、その系譜を成立させている原則を裏切ること、それも含めて意外性の追求が見られること。このように、作者の創意工夫が、明らかに看取されるといえよう。

次いで内容的側面として、色彩感覺を中心とした美的要素が見られること。それは溫庭筠の美意識を想起させる。ただ彼の詩詞では主要な位置におかれていた感覺美が、ここでは従の位置におかれているに

すぎない。ここで描かれているのは、あくまで深い業を抱えて苦惱し、激しく愛し、裏切り裏切られ、絶望し、死んでいった多様な人間の激しい生きかたである。ここでは觸れ得なかつた前記三例のほか、⑫の己の才能に絶望して首つり自殺する青年、⑬の十歳餘りから才覺と工夫努力によって巨萬の富を得た男、⑭の亡夫になりすまして従軍した女など、ラディカルに生を燃焼した人間の姿が見い出されるのである。

Ⅲ、志怪的作品に就いて

一般に、志怪小説には、大別して次の二種が見られる。第一は、六朝において壓倒的多數を占める怪異に關する記録風の短章である。第二は、傳奇と同様の時空が形成され、主題の展開や說話要素の複雑化が見られる作品である。傳奇との類別が難しい作品であるが、傳奇が人間を描くのに比重を置くのに對し、これらの作品の主眼は、あくまで怪異を記すことにある。「乾闥子」に收められているのは、いずれも後者のタイプである。それらは、⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓(⑭⑮⑯)の十二篇である。各篇を簡単に説明すると、いわゆる凶宅譚が⑯⑱、鬼神や妖怪の異事を記すのが⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕、柳の樹怪⑶、狐妖⑷、妻の體のたて半分が無くなり、後に接合する話が⑸である。この中からその特質が際立っている作品を選んで、以下に論じたい。

最初に、⑸「何讓之」(以下「何」と略す。)について述べる。梗概は次のようである。

上巳の日、洛陽に赴いた何讓之は、華かなにぎわいの中で、風體異様な老翁を見かける。人間ではないと思つて捕えようとすると、丘の中に逃げる。何があとを追ひ穴に至ると、狐になつて逃げ去り、穴中の机上に文書が残されていた。數日後、一人の僧が何を訪れ、

三百緡で文書を買戻したいと傳える。翌日、僧は何に三百緡を贈るが、何は欺いて文書を返さない。一ヶ月後、一年ぶりに弟がやって来る。自慢氣に文書を見せると、弟は狐に化し、その後美少年に變身して文書を持ち去った。ほどなく何は逮捕される。宮中の緡三百匹を盗んだ罪である。申し開きできぬまま、何は刑死する。

これは、狐書をめぐる狐妖譚である。前掲表の關連資料に四種の類話を列挙した。これらの類話も、狐書を手に入れた人間が、取り戻しに来た狐を拒絶して痛い目に會わされたあげく、文書を持ち去られるという大枠は同じである。文言小説の三篇の中で最も「何」に近いのは「王生」であるが、それにも見えない「何」の獨自性を以下に指摘したい。

まず、最初に出現する老翁である。他の三篇とも、直接狐に出くわす。それ故、この老翁の登場は、作者の創意と看做せよう。老翁は、上巳の華やいだ情景に登場し、それとは場違いな不氣味な詩を吟ず。

出沒頭上日、出沒す 頭上の日、生死眼前人。生死す 眼前の人。

欲知我家在何處、我家は何處に在るかを知らんと欲す、

北邙松栢正爲鄰。北邙の松柏 正に鄰爲り。

沈佺期の「邨山」や王建の「北邙行」を出すまでもなく「北邙松栢」の語には、濃厚に死のイメージがたちこめ、人間の命のはかなさを、冷たく見据えている。この並々でない人間としての人格化こそ、他の篇と大きく異なる點である。

次に指摘したいのは、何の背信である。「王生」では單に拒絶するだけだが、何は積極的に狐を欺こうとする。もらうものだけもらって、後は知らぬふりをする。何度も取りにやって来た僧は、最後は「無言

而退」。何に欺くよう勧める友人も含めて、ここには狐よりもむしろ人間に對するシニカルで辛辣な作者の視線を感じるのである。

當然、他の篇よりもその報いは大きい。「王生」では家を無くし落ちぶれるだけだが、「何」では死に至る。そのプロセスで「緡三百」が最後に意味を持つてくる。前の記述が布石であったことが明らかになるという工夫を、この篇にも見い出せよう。

以上のように、狐書をめぐる狐妖譚の枠組みの中で、この作品にも他の狐妖譚には見られない創意工夫や人間觀が見られることを指摘し得よう。

狐妖に限らず、妖怪には、人間を感わし、命を失わせる恐しいものもいるが、『乾腰子』中の妖怪は、總じて讀者に餘り恐怖感を與えない。

⑧「道政坊宅」は、凶宅譚の一種である。凶宅譚を一般化すると、①不吉な家がある。②そこにとまりこもうとする人物が現われる。③夜、怪の出現とそれへの對應。④原因の解明、というパターンになる。事實、②「寇郛」はこのパターン通りに展開するが、原因は、壁に塗り込められた女の怨念で、妖怪による怪異ではない。⑧も、①②までこのパターンであるが、③以降に出てくる妖怪は、人間の騒々しさに音をあげて引越す老婆と、彼女が別れの挨拶に行くと日なたぼっこをしている老人である。聊か滑稽味さえあるこの凶宅譚は、數ある類話の中で、かなり風變りな作品といえよう。

⑨「梁仲朋」も妖怪譚の一種であるが、この妖怪もまた人間に裏切られる。この妖怪の特徴を整理すると、(一)鳥類に近い。(二)夜、人間が騎行して出會う。(三)人間に語りかけ、親近感を示す。(四)自分のことを他の人間に話すのを嫌がる。(五)酒を好む。『太平廣記』卷三五九〜三六七には妖怪譚が集録されているが、それらを右の五點と比べると、

(三)(四)に相當するものが見當らず、「梁仲朋」も妖怪譚としてはかなり特殊であることがわかる。親し氣に梁に近づくこの妖怪は、振舞われた酒を飲んでいい氣分になっているところを、梁に首を斬りつけられるのである。三年以内に梁の一族すべてが亡くなったという結果は報復としてはむごいが、それだけ妖怪の憤りが激しく、逆にいえば妖怪の親近感には偽りがなかったことを示しているよう。

このように『乾闥子』における妖怪の描き方には、作者の、妖怪への嫌悪感が感じられないが、『薛弘機』では、明らかに作者の精怪への情を認め得よう。次に梗概を記そう。

河邊に住む隱者薛弘機のところへ、柳藏經と名乗る男が訪ねてくる。二人は意氣投合して大いに議論した。ただ『易』だけは難しいからと柳は避けた。その後、二度訪れたが、二度目はひどく去り難い様子であった。その夜、大風が吹いた。翌日、魏王池畔の大枯柳が倒れ、中に百餘卷の經典があった。薛が行って拾い收めると、水びたしの經典の中には、『易』だけがなかった。

この篇でも、『易』という布石が、最後に意味を持って完結する工夫が見られる。だが、その面白さ以上に胸に迫るのは、枯柳の、滅びを前にした哀切極まりない別れの姿である。ここでは、柳は樹怪でありながら極めて人間的な存在感を賦與され、別れに際して薛に次のような五絶一首を贈るのである。

誰謂三才貴、誰か謂はん 三才貴しと、

餘觀萬化同。餘は觀る 萬化同じきを。

心虛嫌蠶食、心虚しく 蠶食を嫌ひ、

年老怯狂風。年老いて 狂風に怯ゆ。

天・地・人の三つの働きを尊いと人はいうが、人間も樹怪も同じで

唐代小説『乾闥子』に就いて

はないかと歌う起承句の意は、滅びを前にしての想念であることを顧慮すれば、一層明らかである。すなわち、この世のいかなる存在も、滅びの前ではみな等しい、すべての存在はやがて滅びるといふ意味では同一である。これはそのまま作者の價値觀に通じていくのではないだろうか。それゆえ、『乾闥子』中の怪異は完全な人格を與えられていたり、また理由なく人間に危害を及ぼさなかつたりするのである。以上、志怪的作品を通して、やはり巧みに布石を敷く工夫が見られることや、内容的には、人格化された怪異が登場し、それは、滅びの前では怪人も人も等しい存在だ、という作者の想念を託したものであると考察した。

IV、志人的作品及び雜錄に就いて

志人小説とは、個性的な人物の非凡な言動を、その場面を切り取るようにして記した文章である。また、その人間が有名人である場合が多く、切り取られた場面の時空は、歴史の一断面の意味を持つことになる。つまり、歴史の異聞、逸聞と重なることになり、それに博物的要素を加えたものを雜錄と稱して、一つの領域とする。ここに屬する篇は、ⅡⅢに挙げた以外の二十八篇である。これらの篇は關連資料で記したように、先行の小説をそのまま採録している場合もあり、作者の創意は認め難い。したがって、採録の際の作者の着眼點に注目して、以下に分析したい。

ここには、實に多様な人物が登場する。まず目につくのは、いわゆる奇人、變人と呼ぶべき人物である。

(7)「鮮于叔明」は南京虫を、(8)「權長孺」は爪を好んで食べるといふ、その風變りさを買ったのであらう。(9)「裴樞」は、『太平廣記』編

急に收められている。褊急とは、度量が狭く性急なことである。裴の居る州に任官してきた男がすぐに挨拶に來なかつたので、三日後訪れた時には怒って家に入れなかつたという。この裴樞を痛烈にやつけるのが、④「張登」である。科擧の受験生が獻じた文章を裴が譏ると張は言う。「君はロバの仲買人なのに、馬の値を決めようといふのかネ」。このメタファの直撃を受けるのが、褊急な裴樞だといふことが一層、面白い。これは『世説新語』排調篇や輕詆篇の直系ともいふべき、激しい嘲弄である。この激しさが武人になると行動に迸り出る。⑤「哥舒翰」は、都に使いに出たまま當時の權力者楊國忠にとり入って歸って來なかつた使者を杖殺する話である。

これらの過激な言動を、恐らく作者は、面白がりこそすれ批判の意は無かつたからこそ採録したのであらう。そういう意味で、これらの人々は、作者と共通する部分があつたのでは、ないだらうか。もし、作者が温庭筠であるならば、温庭筠にその類似性が見いだされるはずである。次にそれを求めたい。

温庭筠の傳記の不透明さに比して、彼の人間像を物語る逸話は數多い。そのすべてを眞實とは看做せないまでも、そのような逸話を生み出す可能性を彼が有していたことは否めないであらう。それらの逸話の中に、權力者を嘲弄する話が見える。その權力者とは、大中年間宰相であつた令狐綯である。ある時彼が「舊事」を温庭筠に尋ねたところ、

事出南華、非僻書。或冀相公變理之暇、時宜覽古。(唐詩紀事)卷五四)

こう答えて令狐綯を怒らせたという。これは宰相時代の話であるが、大中三年、綯が中書省人の時にも「中書省内、將軍坐」(唐才子傳)卷

八)と言つて綯の無學を譏つたという。また、微行した宣宗をそれと知らず、傲然として詰つたとも伝えられている。これらは、温庭筠の反權力志向と捉えるべき逸話であらうが、その個性の強烈さは、前記の人々に相通するものと認められよう。

この他に「乾驥子」には、科擧に關連する話がある。⑥「鄭羣玉」の鄭は、裕福な家の息子で、財力に任せ派手な仕度で長安に受験にやつて來ると、合否を占つてもらふ。見料はずんだ鄭に、當然卜者は「合格間違いなし」と鑑定した。だが、現實は白紙答案という結果に終つた。⑦「梅樞衡」も、科擧の試験場が舞台である。奇才と評判の梅が、押韻に憊む他の受験生に、勿體ぶつて自分の草案を見せる。だが、その草案と解説の餘りの幼稚さに、皆がドツと笑つたという話である。また、⑧「閻濟美」は、傳奇に分類したが、ここにも自信満々で豪華に飾りたて、同宿の閻に傲慢な態度を見せる廬という男が登場する。彼も呆氣なく不合格になつてゐる。

これらの話に共通するのは、うわべの虚飾を暴いて内實の貧弱さを嘲笑するといふ點である。これは、作者のシニカルな人間觀を物語るとともに、作者に内實の貧弱さを嘲笑し得る才覚がなければならぬ。温庭筠の科擧をめぐる逸話にその才覚を求めるならば、次のように枚擧に違ない。

温庭筠燭下菅起草。但籠袖凭几、每賦一詠一吟而已。故揚中號爲温八吟。(唐摭言)卷一三)

每入試押官韻作賦、凡八叉手而八韻成。時號温八叉。(全唐詩話)卷四)

また、温庭筠が科擧の試験場で代作する話も數多く傳えられており、大中九年(AD895)には、京兆の尹の息子の代作が發覺して、試験官彈劾事

件へと發展している(『東觀奏記』下)。つまり、眞の奇才である温庭筠の眼には、多くの梅や鄭のような人物が映じたことは、確實といえよう。

最後に、雜錄に屬する文として④「快語」、⑤「奚毒」を挙げたい。いずれも原文は不明であるが、恐らく前者は言語解釋の備忘録的記述で、後者は『本草』「烏頭」などにも見える博物的記事と考えられよう。わずか二篇であるが、傳奇的、志怪的、志人的のいずれにも屬さないこの種の記事も記されたことは無視できないであろう。

V、温庭筠との關わり

II・III・IVにおいて『乾驥子』の特徴を追求していくなかで、作者の人間觀や價值觀が、次第に明らかになってきた。それは次のようにまとめられよう。人間とは危うい存在であり、その危うさは、胸中に暗黒を抱いた生を餘儀なくさせる。それは人を苦惱や葛藤に導き、激しい生の燃焼へと驅りたてる。その暗黒とは、換言すれば滅びである。滅びの前では、萬物は本質的に等しい存在となる。

このような價值觀、人間觀を持つ作者が、温庭筠であるという可能性は、果して有り得るのか、以上にそれを見たい。

言うまでもなく温庭筠は、李商隱、杜牧と並ぶ晚唐を代表する詩人であり、「花間の鼻祖」と稱される詞人でもある。それらの詩詞に關する論文は、異口同音に次のように論評する。すなわち、華やかなものが滅びを内包し、それが次第に露わになっていく時に見せる衰殘の美を主題として詠じた。また、「士君子のモラル意識がブレーキとして強く作用した」領域である詞に彼が手を染め、しかも唐代において突出した存在になった理由を、村上氏は「既存の體制とそれを支え

る價值觀」の崩壞を彼が知悉しており、士大夫階級の價值觀の呪縛から完全に自由であったからとされる。このような温庭筠の價值觀を論者も首肯するが、それは滅びを前にした柳の樹怪が「萬化同」と吟じたのと同じであるといえよう。また村上氏は、士大夫階級ががみついていた科擧の「欺瞞性を暴露し、嘲笑し」た温の逸話を、彼がその崩壞を知っていた證とされるが、嘲笑する彼の姿は、『乾驥子』中の過激な人々と確實に重なっていく。このように價值觀や人間觀の點で『乾驥子』の作者と温庭筠は限りなく近い。假に温庭筠が作者でないとしても、彼の名に托される所以はここにある。

次に、視點を變えて、もう少し具體的な究明を試みたい。それは、『乾驥子』各篇の時間的地理的背景の探査である。時間的には、中宗の神龍年間から、玄宗の太和年間までを背景とし、貞元、元和年間の話が最も多い。前述のように温庭筠の生卒は不明だが、卒年は確實に咸通以降であるから、温庭筠が作者であることを否定しない。地理的背景としては長安が最も多く、その他、四川から長江沿いに東流する地域が目立つ。これも、温庭筠の足跡内に収まる範圍である。小説におけるこのような時空的調査は餘り積極的意味を持たないことが多いが、それでもこれによって、彼が作者であることは否定されなかつたといえよう。

次いで、『乾驥子』を唐代小説の流れの中に置いてみよう。これまで唐代を初唐から晚唐まで四時期に分けて捉えることが常であった。これは、嚴羽の『滄浪詩話』によって始められていることから明らかなように、あくまで詩を對象とする際の分別法である。李宗爲『唐人傳奇』(中華書局、一九八五年十一月)は、同じく四時期ではあるが、次のように唐代小説を位置づけている。

初期(唐初—代宗朝)……「古鏡記」「補江總白猿傳」「紀聞」「靈怪集」

「廣異記」「離魂記」など。

盛期(德宗—敬宗朝)……「任氏傳」「枕中記」「玄怪錄」「柳氏傳」「李章

武傳」「鶯鶯傳」「李娃傳」など主な傳奇作品

中期(穆宗—懿宗朝)……「集異記」「續玄怪錄」「河東記」「博異志」「宣

室志」「傳奇」「甘澤謠」など。

晚期(僖宗—唐末)……「劇談錄」「闕史」「三水小牘」など

この流れを大まかにまとめると、盛期には単行の傳奇作品が多く、中期から小説集の體裁を持つ書物が増えていくといえよう。「乾腰子」もその體裁から中期以降の作品と看做せよう。だが、恐らく前後すると思われる「玄怪錄」「續玄怪錄」「原化記」「宣室志」などの小説集と比べてみると、「乾腰子」の特異性は際立っている。つまり、右の小説集の中では多數を占める神仙をめぐる話や冥界譚などの道教的佛教的要素が皆無であるからだ。それに代わって描かれる主なものは、前述の如く、多様な人間の生であり、これはやはり作者の強烈な個性と無關係ではあるまい。また、「乾腰子」の領域の廣さも、他の小説集には見當らない。強いて挙げれば、段成式の『酉陽雜俎』であろう。この書の内容を篇目を舉げて三領域に分類すれば以下のようになる。「天咫」「壺史」「怪術」「冥蹟」「諸臆記」「支諸臆」などは志怪に、「忠志」「語資」は志人に、それぞれ分類されよう。この書の半分を占める博物的要素は雜錄に、「盜俠」は傳奇に屬されよう。兩書の印象はかなり對蹠的ではあるが、このように領域における類似性が認められよう。それは、兩作者の小説概念の類似性ともいえよう。つまり、段成式と『乾腰子』の作者は同様の小説概念を持っていたことになる。そうすると、『乾腰子』の作者が溫庭筠である可能性は格段に高

まる。以下にそれを述べたい。

段成式と溫庭筠との交流は、各書に明らかであり、特に次の記述は注目される。

(段成式) 退隱於岷山。時溫博士庭筠方謫尉隨縣。廉帥徐太師商

留爲從事。與成式甚相善。以其古學相遇。……略：遞搜故事者九函在

禁集中。爲其子安節娶飛卿女。(『金華子雜編』)

溫庭筠が襄陽で段成式と交遊したのは、夏氏の年譜によれば、咸通元年(AD860)である。この頃二人は「故事」を搜して「九函」にもなったという。段が古今の書物を收集博覽し、それを基に『酉陽雜俎』を著わしたことを思えば、溫庭筠にもその可能性は十分あろう。しかもこの時期に、『漢上題襟集』(『新唐書』藝文志、總集類に著録)なる唱和集が編まれており、溫段を中心とした一種の文人グループが形成されていたことが知られる。唐代小説の多くは、このような文人グループの中で語られた上で記録されたらしい。そうすると、溫庭筠が小説集を編む確率はかなり高いといえよう。また、胡應麟が指摘するように、兩書ともに食物に關する書名を冠している類似性をも有している。以上のことから、大中年間、權威權力を愚弄した學句、襄陽に流れてきた溫庭筠が、そこで段成式と意氣投合し、『乾腰子』と稱される小説集を編んだ蓋然性は高い。更に現存の『乾腰子』が、中唐以降の小説集として唯一『酉陽雜俎』と領域を同じくし、小説集への概念に共通性が見い出されるならば現存の『乾腰子』を、溫庭筠のその残存作とみて、ほとんど差し支えないのではないだろうか。

おわりに

Vの結論通り、『乾腰子』の作者が溫庭筠である可能性が高いとす

れば、小説は彼にとって如何なる意味を有していたかについて一言したい。

そもそも作者が温庭筠であることへの疑念は、明らかに後世の筆と思われる部分の存在や、『周秦行紀』の例などのように唐代小説にはつきものであるほかに、前述した通り、この書に「艶麗」な詩詞が無いことにも發していよう。温庭筠はなぜ戀愛小説に彼らしい詩を記さなかったのか。結論からいえば、彼にとって小説は、詩詞の才を誇るための道具ではなかったからではあるまいか。これまでこの『乾驥子』に、巧みに計算された完結性への工夫や、話を支えている原則を裏切つてまで意外性を追求する創意を見た。それは作者が、並々ならぬ情熱を傾注すべき対象として小説を捉えていたことを物語つていよう。士大夫階級から蔑視されがちな小説という文學領域を、詩と同等に、詩とは別箇の獨立した対象として使いわけたがゆえに、温庭筠は、艶麗な詩を記さなかったのである。それは、既製の價值觀から自由であつた彼ならばこそ、可能であつたといえよう。『乾驥子』は、多様な人間の生と死と愛を描くことによつて、彼が詩詞においては象徴的にしか表現し得なかつた己の本質を、自らが雄辯に物語つた小説集といえるのではないだろうか。

注(1) 本文に引く『直齋書錄解題』の他は以下の四種である。『唐才子傳』

卷八、『紺珠集』所收『乾驥子』(乾驥)と題す)は、「聊甘衆口」の四字が無い。『郡齋讀書志』は、「語怪以悅質、無腴味之適口、故以乾驥命篇」と記す。これを部分的に引くのが、『少室山房筆叢』卷三五。

(2) 四庫館臣の「其所見之書、多爲古本、亦有足與世所行本互相參討者」(四庫全書總目提要)子部雜家類七『紺珠集』十三卷提要)なる評價もある。

唐代小説『乾驥子』に就いて

(3) 王仁俊の案語によれば『太平廣記』卷四九五に據るとあるが、『太平廣記』では、「歌舒翰」に作る。

(4) 諸井耕二「湯庭筠の『乾驥子』について」(『中國文學論集』2、一九七一年五月)に據る。

(5) 天寶末の功臣李抱玉の青衣だつた娘が、男装して國子祭主を賜つた話である。

(6) 前掲諸井論文(注(4)参照)と渡邊精一「温庭筠が書いた小説」(私家版、一九八一年十一月)を参考にした。④「考古質疑」は、小川環樹編『唐代の詩人—その傳記』「温庭筠」(横山弘氏擔當、大修館書店、一九七五年十一月)の指摘に據る。

(7) 『少室山房筆叢』卷一九

(8) 魯迅『中國小説史略』第八篇傳奇についての語。

(9) 六種のうち文言小説に限ると「李文敏」「崔尉子」「卜起傳」であるが、「卜」は北宋の劉斧の書に收められており「陳」より後は明白である。

「李」の出典である『聞奇錄』の『太平廣記』に収録されている三十八篇を調べると唐末から五代の書と考えられ、『直齋書錄解題』卷一一も同様に記す。「崔」の出典である『原化記』については、内山知也『原化記』について(『文藝言語研究』七、一九八三年八月)に據れば、元和期の作品とみなされ、「陳」に一番近いと考えられる。

(10) 夢が帝の即位まで左右したという記述が見える。(『太平御覽』卷三三八引)

(11) 例えは『文選』卷四六には、顔延之、王融の作が見える。唐代でも杜甫の「麗人行」など。

(12) 村上哲見「温飛卿の文學」(『中國文學報』第五册、一九五六年十月)、抽木利博「温飛卿詞についての一分析」(『漢文學會會報』二六、一九六七年六月)、齋藤茂「温庭筠詩論—その近體詩をめぐって—」(『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』汲古書院、一九八六年三月所收)など参照。

